斯やうな經歷をもつてゐるのである。そして永富獨嘯庵が、彼の門に參じたのは、この筑紫山中の草庵時代であつたらしい。

喜獨嘯庵至

才氣睥睨海内高、風流蕭洒一時豪、不レ妨蓮社來投レ宿、但笑留レ君無濁醪。

そのうち、しかし彼はまた山庵を出て、龍光寺に住山することになつた。次の偈はこの事實を語つてゐる。

出庵

秋色茅廬雲半間、百年買得沃州間、孤松片石長相約、可レ笑風狂又出レ山。

移錫筑前龍光山寺

筑水關山十里雲、龍光蘭若一峯分、霜楓自作二布金色一、相引鐘聲樹裡聞。

この間龜井南溟、南溟の俗弟に當る幻庵和尚及び長崎の大潮和尚等と屢々交際した形蹟がある。そして次のやうな偈を見るのである。

退院

九年一住臥二藤蘿一、夜雨松風供二病痾一、緣謝今朝蓬累出、三衣猶笑不レ堪レ多。

原氏建立草堂延余卽日移錫

帝釋拈來草一莖、三千梵刹忽時成、卽今長者不レ勞レ手、命二孔方兄一現二化城一。

この草堂にどれ程居たのか明瞭でない。今度は其處を辭して京都に游ばんとしたのだ。

將京游別村里老少

遲々知命出レ鄕人、風雨山川多病身、老少傍レ衣淚如レ雨、歸期笑道在二靑春一。

五十を過ぎて住み慣れた地を去るのだ。一切の俗情を拋擲した佛者にとつても、別離の念自ら斷腸のものがあつたと見ゆる。

東山庵居

放肆從來誇二惰慵一、東山幾度寓二踪蹤一、雙林楓樹昔時色、依レ舊猶聞長樂鐘。

臘靜

臘靜常將二七夜一期、茅廬聊此傚二禪規一、龍山鐘鼓三更後、坐了爐邊香八枝。龍山指南禪寺

筆者は、夜雨和尚と呼ばるゝ越宗の事蹟に興味を深く感じたのであるが、しかし今までの處、

彼に關する記錄は「草庵稿」一部の外には、少しも探し出す事が出來なかつたのである。それで「草庵稿」以後、卽ち東山山居以後の彼に關しては、少しも知る所がない。「草庵稿」は明和七年春の刊行にかゝる。よつてその前年卽ち明和六年の除夜の感懷を最後に此處に抽出して此稿を終ることとする。

寓居除夜

今夜人間歲月窮、蕭條客舍世情空、寒燈獨惜殘臘盡、五十三年一夢中。

一元紹碩のこと

私は無住庵主一元と落款した一軸をもつてゐる。まことに稚拙な文字で、「我宗勿嫌底之法」と記した一行ものである。印章は壺形の一元といふのと、角形の紹碩といふ二つが捺してある。前の所持者はその紹碩といふ印章から非常な野心を起して、それは曹洞の峩山紹碩でないかと考へたのである。しかし峩山は總持寺開山瑩山紹瑾の高足として、事實上總持寺經營の事務に任じた程の人で、時代に遙かの懸隔がある。それで結局、どんな人物かわからぬとあきらめて、私に讓つてくれた。私も最初は、少しもその素性がわからぬので其儘にして置いたが、一二年經つたある時、「妙心寺史」を讀んでゐると、ふと一元紹碩の名に出遭はしたのである。それは同書の「法山通記年表」のうちに、

寛文七年、常陸高乾院一元紹碩示寂(六十六)

といふ文字である。そして更らにその本を繰つて見ると、當時諸藩が禪宗の學僧を養成する爲

めに設けた藩祿僧制度の變遷を記した一章のうに、其藩祿僧に二種あり、一つは幼僧藩祿（幼僧より修學せしむる爲めに祿を附す）他の一つは晩達藩祿（晩達の學僧に祿を附する者）前者は仙臺の通玄、天嶺、法山の隱溪等の如き伊達家の藩祿學僧、其他尾藩の靈峰（法山麟晩院住）紀州の逸堂（吹上等）伊豫伊達家の大易、豐後臼杵の賢巖、濃州加納藩の師蠻及び弟子の師點等の如き者である。晩達藩祿では相馬の一元、水戸の大岳、肥後細川家の性天、弟子の空山等をいふのである。尙播州京極家の盤珪や其門下の節山とか、肥後諫早家の無門とかは之に屬する者である。

といふ説明を見出した。そして更らに同書を繰つて見ると、白隱の師正受老人の條下に、

其後師（正受）は門より入る者は家珍にあらずとして師（至道無難）の膝下を辭し、諸方に歷遊し、諸禪室に參叩せんと欲し、まづ東北地方に向ひ、仙臺の覺範寺に至り虎哉の峻竦なる禪に親炙し、後轉して常陸に入り高乾院の一元に惡寃家の緣を結び、太く鉗鎚を蒙り、居ること數年であつたが、再び東北寺（無難の寺）に歸り、無難に隨侍したのである。されど師は東國詢遊中、一元より楞嚴經の講讃を受け、經中に於ける七處の徵心、八還辨見の秘法を獲得し、

歸來專ら楞嚴三昧に入り、常に正授三昧（楞嚴經中の）を以て一流禪機の眞髓とすべきと爲し去つた。其故、師は自ら稱して正授と稱し、一生を終られたのである。

といふ記事を發見したのである。これでほゞ一元といふ人物の素性が明瞭になつた。

この妙心寺史の記事に對して、正受老人研究家の阿部芳春氏は「師が一元に參ぜし事、川上氏は文獻ありと曰はるれど未見ず考證せず」というてゐるが、しかし結局、正受が巡遊中留錫したのは一元の處だけであつたといふ事實は、これを肯定してゐる。

處がこの頃寢ころんで「古畫備考」を繰り返してゐると、狩野興以のところで、

興以布袋賛

再住妙心

隨意庵主題

として、その下に一衣と讀んだ臺形と紹碩の角形の印章を捺してあるのを發見した。「古畫備考」の印章は大慨その印文を筆寫したものであり、中には讀み取つた印象によつて形を作つたものもあるやうである。だからこの一衣は一元の誤りであることは一目して瞭然だ。從つて、この興以

の布袋の圖に賛したものは一元であらうことは容易に想像し得る。たゞその際問題になるのは、一元の年齢だ。「古畫備考」によると興以は寛永十三年に死んでゐる。そしてこの寛永十三年は一元三十五歳であるから、妙心再住の印章をもつ年頃ではなからうと思はれるのである。勿論畫賛は必ずしも畫が出來た際に入れると限つたわけではなく、後年になつて書き入れたものもある譯だから、その間少しも不思議はないやうに思ふが、しかし多少、其處に氣になる點も在る。

「古畫備考」の布袋の圖については、斯様に多少氣になる點もあるが、しかし、一元その人の側からいへば、これによつて更らにその輪劃が明瞭になつたといへる。彼は無住庵主ともいひ、隨意庵主ともいうたのであらう。そして當時關東の禪林においては、兎も角相當に鳴らした學僧であつたのであらう。年代は寛永から寛文にかけてが、その圓熟期であつたらうと推測される。

最初全く見當のつかなかつた人物が、だん〳〵その面目を判然とさして來るのは、われ等には一種の昂奮をそゝる興味だ。素より閑人の閑事業ではある。しかしながら、一面からいへば、それは小さいながらも一つの發見だ。他人には極めて無意義なやうに見ゆる無名の墨蹟ものを愛好してゐるものにも、斯様な喜びや、樂しみがあるのだ。

これと同じやうな經驗は、幡隨意白道の消息を發見した際にも味うてゐる。これも前の一元と同じ人の手にあつたのであるが、まづ第一に白道の正體が知れず、それに禪僧以外のものは要らぬといふ前の持主の主義から、また私が讓り受けた。文言は現世はうたかたの如くあぢきなきものたゞ念佛第一だと說いたもので、宛名は單に一齊となつてゐる。これも二三年その儘に放つて置いた。ところが、神田で古本を見てあるいてゐるうちに、ふと白道といふ文字が眼に入つたのである。それは幡隨意上人傳といふ本のうちに於てゞあつた。よつてその本を買つて歸つて見ると、それは淨土宗の大德である。神田駿河臺に幡隨院を建立した開祖で、その傳記はまことに荒唐無稽と思はるゝやうなことが書いてゐる。一體淨土宗の高德には、そのやうな傳說が多いやうだ。しかし兎も角、白道が幡隨意上人の演蓮社智譽向阿であり、家康の意を受けて京都智恩寺を董したこともあり、またキリスタンを撲滅して、その信者を佛敎に轉向せしむるため長崎まで老軀を運んだ事實もあることを確めた。それでまづ大體白道の正體が摑めたのであるが、その後遺墨の寫眞と比較して、花押その他の點から私の所持してゐる消息もやはり、この白道のものであると信ずる根據を一層固くするに至つたのだ。

原の白隱もの

昭和十六年の初秋、正宗國師白隱慧鶴和尙の生地であり、且つ亦その一生の大部分を其處で過ごした駿河の原町に、白隱遺蹟を見るため、閑人の閑旅行を企てた。一行四人、三島をすぎてすぐの原驛で下車し、驛のボールドに、白隱の墓のことも、白隱の生涯住持した松蔭寺のことも記載してないことをいぶかりながら、線路づたひに街裏の間道を三四丁も行けば、小松原があり、それを拔ければ松蔭寺がある。老松亭々、四隣閑寂、今でも好個の禪林だ。寺に續いて墓地があり、その墓地の一角に白隱の墓がある。普通の墓地より稍小高くなつてゐるが、高さ三四尺の尋常の墓石で、五百年間出の大宗師を表象するには、何やら物淋しい氣もするが、しかし一生を黑衣の田舍坊主で終つた白隱としては、それが勿論本望なのであらう。

この松蔭寺も白隱、遂翁の時代が過ぎると、その以後はあまり振はなかつたやうだ。現に白隱の敎を受けた峩山がこの寺で提唱會を開いた時でさへ、すでに衰兆が見へてゐたものらしく、峩

山がそれを警戒してゐるのである。そしてその形勢が、それからます〳〵明白になり、特に維新後は、ほとんで荒廢というてよい狀態に陷つてゐたといふ。それを前住の山本元峰老師が苦心經營して、復舊を圖り、更らに現住宗鶴師に引ついで、近來、頓に面目を一新したといふことである。

さて宗鶴師の案內で、まづ第一に見たのが寶藏だ。此處には主として白隱、遂翁、東嶺の墨蹟中、幅面の大きいものが保存されてゐる。達磨にしても、觀音像にしても、みな雄大なものである。同行の中川男爵が、先住元峰和尙に寄贈した白隱手澤の汁椀(沙羅樹下老人と署名したもの)も此處に納まつてゐた。寶藏とやゝ斜め向に相對してゐるところに、白隱像を安置した祖師堂がある。よく寫眞になつてゐて普通に知られてゐる木像であるが、面のあたりこれを仰ぐと、實に神采奕々、一世を睥睨して天下の禪僧を叱咤した面影が生きてゐて、その巨口が直ちに怒罵の聲を發ち、その手が直ちに棒を飛ばして來さうに思はれる。一般にこの木像は、白隱自作と傳へられてゐるが、おそらく江戸の名ある彫工の手に成るものであらうと宗鶴和尙が說明された。

庫裡に招ぜられて、方丈の前を通ると、其處にはまづ、

梅に松奥の社は問はずとも

の一句を賛してゐる華表の一幅がかけられてある。白隱が幼時天神を信仰せよと、母親からいひ聞かされたことは、白隱傳にみな記してゐる。そして松蔭寺からすぐ近いところに、天神祠があり、白隱が老年になつてからも其處に參詣したと傳へられてゐる。祠の前の華表、松と梅とが入り交つて枝を交してゐる風情等々、直ちにこの句を想像させる趣があるのであるが、これは白隱生前からのものか、それとも後になつてからの人工的趣向が加へられたものか。

宗鶴師の努力によつて、白隱關係の文書筆蹟が大分松蔭寺に集まつてゐる。そのうちでまづ第一に目につくのは、白隱自筆の細密な註を加へた法華經である。法華經については、白隱まだ若い時分、これを讀誦してその内容の因緣譬喩のみ多くして得る處尠いといふ理由で、此經もし功德あらば、諸子百家、謠書伎典の類も亦當に功德あるべしと批判したといふことであるが、しかしその後齡四十二の享保十一年秋、これを讀んで、譬喩品に至り、乍ち蛩鳴古　、聲々相連るを聞いて、忽然としてその深理を契當し、初心時代の疑惑釋然として氷解、大悟徹底の工夫に一段の飛躍を劃したと傳へられる。斯やうな因緣をもつ經典であるだけに、その研究は老後に至つて

も、おそらく一日も怠らないところであつたらうと想像されるのである。從つて紙上、全面に亙つて書き入れられてあるこの註釋が、白隱研究の見地からいうても、また廣く一般佛教研究の見地からいうても、如何に貴重な資料であるかは多言を要せずして明白なるものがあるというてよからう。これは一時他に渡つて、殆んどその貴重さを顧みられぬやうな取扱ひを受けてゐたのを宗鶴和尙が發見して寺寶にしたものだといふことである。

それから「人天眼目」と「へびいちご」の長卷がある。「人天眼目」と白隱との關係について見ると、白隱二十四歳の寶永五年春、越後高田の英巖寺において性徹和尙の「人天眼目」の提唱を聞いた。この性徹和尙の提唱にはそれほど感心した形跡がないけれども、しかしこの高田行が機緣となつて、信州飯山の正受老人に參ずることになつたのだ。卽ちそれは英巖の會中において正受門下の宗格と相識る機會を得、宗格のすゝめによつて正受庵に伴はれたからである。斯やうな關係から見て、「人天眼目」といふものは、白隱和尙にとつては、あるひは特別の意義をもつものではなかつたらうかとも推測される。「邊鄙以知吾」は寶曆四年、白隱七十歳の年に某侯に書き送つたもので内觀を說き政敎一致の趣旨を詳細に述べたものである。この二つを白隱自ら筆にした

ものがこの二卷の長卷だ。このうち「人天眼目」の方は、白隱一流の雄健な筆致を最もよく發揮して、細字にも拘らず、見るものを威壓せねば止まぬやうな文字を並べてゐるが、「へびいちご」の方はまたそれとは變つて、美しい假名文字で、白隱がこの方面にも造詣の深かつたことを示す好個の參考品である。その他白隱自筆の過去帳、白隱、遂翁、東嶺等の消息、中にも原の本陣渡邊家に對する金子借用證文は珍品で、それには白隱のものもあり、遂翁のものもある。おそらく寺の修繕とか、その他何か事のあつた際、必要に迫られた折のものであらう。十兩とか、十五兩とかいふやうな文字があつたやうに記憶してゐる。

白隱の手に成る達磨、布袋をはじめ、いろ〳〵の年代による書風の變遷を語る一行もの、頌、偈等については此處に多く說明しない。たゞその時見たうちで此處に一言することを省き得ぬのは、遂翁の手に成つた山水の對幅である。大雅を思はすやうな規模の雄大な山水であつて、全紙一杯に重疊した山と深い溪谷を描いた手腕は、堂々たるものであると思はれた。

○

松蔭寺を出て細い道を、例の天神祠の前を通り、長澤家（白隱の生家）の屋敷あとにそうて大

通りに出ると、其處に白隱出生の地といふ木標が立つてゐる。其處から更に二三丁行くと、この土地の舊家植松家の前に出る。植松家は代々風流な家柄であつて、特に白隱時代の當主は、京都にも出てゐたのであらう。四條派の誰かの門に入つて、その頃の京都風の畫を描いた人であるさうだ。從つて同家には圓山派、四條派、岸派等、京都作家の所藏品が多い。

現在の主人重雄氏のいふところによると、白隱ものは十五六點に過ぎぬといふことであるが、しかしそれは極めて精選されたものであり、且つまた極めてよく保存されたものである。だからその一點々々が、他において容易に見られぬ趣のあるものであるとともに、それはまた最近描きあげたものでないかと疑はるゝ程の墨色と色彩の鮮明さを持つてゐる。だからそれが他の普通の場所において見せられたなら、おそらくその眞實性について直ちに疑惑をもたるゝに至るであらうと思はるゝ程、白隱ものとしては新鮮でもあり、異彩のあるものゝみでもある。

まづ第一に示されたのが淡彩の觀世音像である。それは小幅ではあつたが、實に細密に描かれたもので、いはゆる虎視牛行の白隱ものとは全く面目を異にしたものであつた。ついで「壽」の字を船にした七福神の圖、彩色曲馬の圖等、白隱にもこのやうなものがあるかと全く目を瞠かす

ものばかりだ。曲馬圖は鮮麗な彩色を施したもので、細い線によつて、支那服を纏うた年少の數人の曲馬師を描寫したものだ。宗鶴師のいふところによると、朝鮮人の曲馬が原驛に來たことが、白隱自筆の文書に殘つてゐるさうであるから、おそらくそれを見物して、その印象を描いたものであらうか。それから達磨の圖がある。賛は「何時見ても」といふだけで、至極平凡であるが、達磨の顏が普通の達磨とは全く異つてゐる。それは一種の溫容、むしろ慈顏といふに近いものであつて、しかも立派に達磨の氣分を出してゐるのである。

更に植松家所藏のうちの珍品は、「猫の卷物」と稱する一卷だ。それは白隱自身の手によつて標題さへ書かれてゐるのであるが、猫の卷物の猫の卷物である所以は、この卷の最後に至らねば判明しない。卽ちこの卷の最後の部分に至ると其處に猫の子の足痕が三つ四つ印象されてゐるのだ。おそらくそれは白隱がこれを書いて置くと、その上を猫が遠慮なく通つて行つて足痕をつけたものではないだらうか。そしてそれを白隱が其儘「猫の卷物」と名づけたものではあるまいか。しかしその卷物の尊重される理由は、決して左樣な偶然の興味に基づく點にあるのではない。それは書といふものに關する白隱の造詣を最もよく表現してゐるからである。卽ちその卷中には書

のあらゆる形式、あらゆる風格がそれ〴〵明瞭に書きわけられてゐるのだ。白隱獨自の書體ばかりでなく、白隱にして斯やうな書も書けるのかと怪まるゝやうな、古今のあらゆる書體が網羅されてゐる。しかもそれが實に立派に自分のものとして書き現はされてゐるのである。その點において、白隱は書における無類の技工家である資格をもつといつてよい。これは確かに、白隱を正しく理解し、その業績を見直す上において缺くべからざる資料であるといつてよからう。

一體、白隱はその壯年時代において、一時翰墨に遁れやうとしたことがある。二十歲臺の憂鬱時代には、何處を見ても光明を認め得なかつたので、結局、文墨によつてその懊惱を慰めようとした。そして詩や書に心を傾けた。當時詩文に名のあつた美濃の馬翁の下にあつて、聯句やその他に日を送つた事實は、その頃の心的傾向を物語る。しかも一日曝書の際に、將來の進路を卜することを心に念じて、目をつぶつて探しあてたものは「禪關策進」であつた。しかもそのうちの慈明引錐の章「古人刻苦光明必成大」の句に直面して感奮、大に精進の勇猛心を振ひ起したのだと傳へられる。左樣な次第で、若い時代から翰墨の趣味が非常に豐かであつた。從つてそれに對する造詣も年とともに自然に深くなり、しかもそれは白隱獨特の鋭敏な感覺によつて批判され、

歸納されて、前代のあらゆる長所美點が彼れ自身の藥籠中のものとされたのであらうと推測される。それとともに、前にいうた美濃時代から三四年後に、伊豫松山の正宗寺に逸禪和尚の提唱を聽いてゐた時代、書の尊重される所以は、全くそれを書く人の德によるものであつて、文字の巧拙によるものでないことを痛切に感得した事件に際會し、年來秘藏してゐた書畫一切を一炬に附したと傳へられてゐるから、其處にまた自づから書畫に對する一つの新しい眼が開け、覺悟が一轉したことであらうとも思はれるのである。かやうな心的經過と白隱自身の偉大なる生涯と敎養とが、相錯綜してあゝいふ風な書となり、畫となつて表現されるに至つたのであらう。

こんな、とりとめもないことを考へながら、植松家の白隱ものを見たのであつたが、それが終つてから、今度は、大雅と應擧と遂翁とを一緒に並べて見ることになつた。大雅は全紙の醉李白應擧のものは枯木寒烏でともに見事な出來であつたが、それを左右にして遂翁の布袋を中央にかけたのである。ところが、この兩巨匠の作を左右にして、その間にありながら、遂翁の作が少しの遜色を示さなかつたので、畫人としての遂翁の力量も、なか〳〵侮り難いものあることをつく〴〵感心した。（昭和十六年十一月）

鎌倉禪と鵠林下

一

明治大正の期間妙心寺派の宿老として活躍した駿州淸見寺坂上眞淨和尚の自傳「忘來時路錄」中に、斯やうな一節がある。

夫れ鎌倉坐禪とは、一則の公案を以て修し、禪定を第一となし、鵠林下の修業は一則の公案にて見性を得れば、それより法身、機關、言詮、難透難解の公案を一々透過させ、其より五位、十重禁戒を一々修得し、尙進んで悟後の修業を爲し、後又拈弄等、微細の上に微細を盡し、大機大用を發得するを得て、始めて已事了畢となす。是れ白隱禪師不世出の豪邁を以て、我國の禪修行上に、一大新機軸を出されしものなり。世呼んで五百年間出の人となすは宜べ也。されど鎌倉禪者派は、之を鵠林會下の梯子悟りと罵る。之に對して鵠林下修業の社流は、鎌倉の鍋

蓋悟りと罵る。是れを當時實際の評語となす。

これは文久元年、眞淨が鎌倉に下つて、圓覺寺の老僧東海和尚の會下に參じた際に、その提撕ぶりに不滿をもつて批評した一節である。禪家の修養に關するそれ〴〵の規範は、門外人であるものゝ容易に理解し得ぬところであるが、しかし左樣な點は一切これを除外して、兎も角、白隱門下の鵠林一派が鎌倉禪に對して一種の嫌らぬものを持つてゐた感情だけは明瞭にこれを看取し得るのである。

この眞淨和尚の見解とほゞ同樣の意思を表明してゐる文獻は、京都相國寺荻野獨園の「近世禪林僧寶傳」である。卽ちこの僧寶傳中、伊豫大隆寺の晦巖道廓和尚の傳にそれが現はれてゐる。獨園はまづ晦巖の修業を述べて、

師、始め筑前仙崖和尚に事ひ教乘を學ぶ。已にして鄕に歸る。西江寺の抗州和尚、師に謂て曰く、汝鎌倉に入り誡拙和尚に參じて可也。師曰く、誡拙什麼なる長所ありや。抗州曰く、嘗て他の遠磨の賛を作るを見るに曰く、九年面壁、宿世業因、偸二得一臂一、失二却半身一と、吾れ是を以て其の非凡を知る也と。且つ曰く、汝鎌倉に至らば、大事を辨得するに非んば、復た歸ること

と勿れ、と。師、是に於て往いて誡拙に依る。蓋し誡拙の晩年、淸蔭、淡海の鉗鎚を受くる者數歲、終に淡海の印記を獲、因て以て當世に名あり。師、人に語て曰く、予の誡拙に參ずるを得たるは實に三四句の賛辭に由る。古人一言半句を以て價を定む、良とに以へある也。吾門辭句を重んずる所以も亦是を以てのみ。師、常に宗門の衰替を慨し、宿弊を矯正し、別に家風を立てんと欲す。學徒をして專ら文字禪を修はしむ。當時宗門、教乘を說く者、多く師の門に出づ（原文漢文）

この中に出て來る抗州といふのは、その頃やはり伊豫の西江寺に住した抗州克文といふ學僧で、後に妙心派の圓福道場を主つてゐるうち七十二歲で坐化した長老である。この長老が晦巖にすゝめて鎌倉の誡拙に參ぜしめたのである。誡拙は鎌倉禪卽ち獨園の所謂文字禪の大成者であり、淸蔭淡海等はその高足であつた。さて其處で、獨園のこの修業に對する批評である。

論者以爲らく、時人晦巖を稱して博覽强記と爲すは洵に誣ざる也。但晦巖、誡拙、淡海、淸蔭三師を得て其の蘊奧を極め、遂に淡海の印記を受く。而して時人晦巖を以て教乘の法師と爲すは、殊に晦巖の本分に非る也。然れども時人知る能はず、亦宜べなり矣。蓋し晦巖の憂ふる所

は、當時の禪和子、乾慧の者多くして、深く法理を明にする者少し。是を以て專ら文字禪を唱へ、毳衲を化導す。其の意時弊を救ふに急にして他を顧みるに遑あらず。是れ晦巖の大を爲す所以也。夫れ晦巖、抗州の一言に由て誠拙に倚信し、終身變ぜず。抗州固に人を知るに明らかにして、晦巖亦道を信ずるに篤き者と謂ふ可し。獨り奈んせん晦巖、月船下人あるを知つて、鵠林下禪あるを知らず。是れ其の好む所に阿るを免れず、若し晦巖をして鵠林下の禪に參ずるを得せしめば、其の造詣恐らくは此に止まらず。惜いかな其の終に此に出づること能はざりしを。晦巖嘗て學者に語つて曰く、古人云ふ、報緣虛幻、要、强ゆべからずと。晦巖の緣、月船下に在りて、鵠林下に在らず、其れ亦所謂虛幻强ゆべからざる者歟。

これが獨園のいふところだ。此處に月船下というてゐるのは、誠拙一派をさすのであつて、即ち誠拙は月船の門下、月船についてその禪風を大成した禪匠であるのだ。

二

實は此處で、鎌倉禪と鵠林禪の交渉を研究するのが自然の道程だと思ふが、しかしそれよりも

まづ月船及び誠拙の事蹟を一應知つた上で、その方に說き及ぶ方が、あるひは便宜でないかとも思はれる。其處で此處にはまづ此等の人々の事蹟を見ることにしよう。

月船の詩偈を集めたものに「武溪集」がある。これは彼の受業の高足、物先海旭の手に成るもので、物先は卷頭に月船の事蹟を簡單に述べてゐる。それによると、

老師諱は禪慧、字は月船、奥州田村郡小野の人也。郡の高乾北禪濟老に投じて落髮受具し、遊方の後、法を東溪門公に嗣ぎ、受業の院に住する者僅に十許年、武の東輝庵に退寓す。三十七年悟として一日の如し。天明開元六月十二日、春秋八十、安祥にして化す。門人遺骨を包裹して本院に歸葬す。（原文漢文）

といふだけである。「近世禪林僧寶傳」の傳ふる所も亦これ以上に出でない。だから月船の事歷については武溪集その他についてこれを探す外に、詳しいことは想像出來ないのである。

妙心寺發行の川上孤山師著「妙心寺史」によると月船の修業について左のやうに說明してゐるのである。

北禪の徒月船は稍々長じて後諸方に歷叩するに至つたので、先づ下總の光福道場に之き定山、

玉洲に就いて心要を廓開するの後、武州の長徳寺に造り海門元東に隨侍し、大に請益を經て、卒に高乾院に歸り、其法位を轉じて同寺に住止するもの十有餘年に及んだのである。後武州永田の東輝庵に寓し、村民と混處し深く晦昧して、開山伊深山中の生涯に倣うた。其德風を欽慕して陸續四集し、遂に庵中狹くして居るべからず、隣村近郊三四里をも遠しとせず、得々來り參究するに及んだ。

此處に出て來る定山、玉洲、海門といふやうな人々は、いづれも九州の賢巖もしくは古月に學んだ人々で、この賢巖、古月の禪風と白隱のいはゆる鵠林禪との對照比較の說明も必要なのであるが、それはいづれ他の機會に讓るとして此處には觸れない。兎も角、これ等關東の禪界に覇を稱した法將の門を叩いた月船が、更らに關西の方面、少くとも近畿方面にも行脚したことは勿論のことであらう。武溪集には、近江の竹生島や永源寺備中の寶福寺等を詠じた偈もある。そして

甲寅歲首時師三十三將二東歸一

歲華三十二重非、一氣新從二天上一歸、東望關雲今不鎖、誰家春草綠依々。

といふてゐるところを見ると、三十三の年に高乾院に歸つて、其處に住止することになつたので

あらうか。そして高乾院に居ること十許年、四十二三歲のころ東輝庵に移つたのであらう。それから三十七年の長い在庵時代が、月船の後進提撕の時代なのであらう。

誠拙は月船について次のやうな偈を詠じてゐる。

一隱三紀、影不レ出レ山、若是佛法、隔二萬重關一滿船載月人何去、衲子無レ由レ窺二一班一。

これによつて見ると、三十七年の間月船は一度も山を出なかつたのであらうか。「武溪集」には左の諸作がある。

住庵

曾自二江西一行脚歸、十年風雨掩二柴關一、常公不レ識庵中趣、又捲二荷衣一出二暮山一。

蓮華峰北竹溪南、借二箇蒲團一坐二草庵一、將謂山中無二一事一、又隨二月色一下二煙嵐一。

一臥十年深鎖レ關、白雲明月照二衰顏一、丁々伐木如相問、人在二西山煙翠間一。

白雲深鎖舊青山、一枕淸風萬境閑、入レ海泥牛絕二消息一、隨レ流菜葉到二人間一。

おそらくこれは東輝庵に於ての作であらう。更らに「武溪集」の劈頭には、「偶成」と題して左の一首がある。最もよく月船の胸懷を吐露したものではないだらうか。

大水小水歸二東海一、一日二日沒二西阿一、如今巴峽猿啼處、落葉開レ門月色多。

なほ次に掲ぐる二首の如きも、彼の庵中生活を語るものとして極めて興趣の深いものがある。

朝陽

山舍靜二朝暉一、傍レ窓補二衲衣一、停レ針纔欲レ語、風起白雲飛。

對月

殘經猶未レ了、月下坐琅々、應二是唐人譯一、欲レ知二義味長一。

禪僧が自ら衲衣を補綴したことは、よく傳へられてゐるところである。月船も恐らく自らそれをやつたのであらう。もし夫れ讀經の眼を暫らく休めて琅々たる月に對し、今讀んだ經の深義を味ふの境地に至つては、まさに山居三十七年、湛寂の生活を飽喫した聖者でなければ容易に味ひ得ぬ禪味であらう。

しかしこの閑寂の境地は、西から、東から、南から、北から訪ねて來る求道の禪和子によつて兎角攪亂され勝ちであつたのである。彼の高足誠拙について斯ういふ話が傳へられてゐる。

師（誠拙）月船に參ぜんと欲す。永田山に上り掛塔を乞ふ。許さず。門宿も亦許さず。時に雨

る。師、雨衣を蒙り、山を下つて直に地藏堂に入り、石地藏の頭に踞して眠る。月船外より歸り、此の體を一見し、大に器許し、歸つて後、僕を馳せて投宿を許す。爾りしより竟に掛塔す

（原文漢文）

これは「近世禪林僧寶傳」に傳ふる所である。同書は更らに隱山惟琰についても同じやうな事實を傳へてゐる。たゞそれは東輝庵ではなく、高乾院でのことのやうに記してゐる。

武州永田の月船和尙、方に三春の高乾院に住し、門風最も辣なりと聞き、往いて敎を受けんと請ふ。寺中掌事の者曰く、今制來集の衲子甚だ衆し。是を以て其後に至る者は皆之を辭し、掛塔し得る勿らしむ。且つ子の年未だ二十に滿たず、參禪未だ晩しと爲さず、且らく他の師に從ひ文字を學ぶに如かずと、師（隱山）聽かず固く請ふこと七日、涕泣流血に至る。掌事者其の至誠他無きを見、以て告ぐ。月船乃ち延見して曰く、吾門雲門來集甚だ衆きに苦む、是を以て新至の者を謝して掛塔を得る勿らしむ。惟、汝固請已まず、顧ふに何を爲さんと欲する。師曰く、生死事大、無常迅速の故を以てのみ。月船曰く我が這裡生大無く、死大無し、復た何の迅速か之れあらん。師曰く、唯、生死無きこと是小子從來疑を懷く處、乞ふ師幸に哀憫を賜へ、

月船曰く汝後生雛僧、果して修禪に意あらば、去て參堂して可也と。是に於て晨參暮請、懈怠あるなし、二十一歳初めて入制接心し微く所得あるを覺ゆ。（同上）

斯樣な有樣で、月船の許へは修禪の雲水が雲集したのである。月船はこれを親切に提撕するとともに、關東禪界の復興についても頻りに心を傾けたものらしい。それは次のやうな話によつて明瞭である。

三

月船自身は、前にもしば〳〵述べられてゐる通り、生涯殆んど東輝庵から外へは出なかつた。しかし彼の門下からは、實際法如、誠拙周樗等が引續いて鎌倉圓覺の名刹に視篆したのである。初め實際は彼の命令によつて圓覺の續燈庵に住留した。「續禪林僧寶傳」によると、

初め續燈大に頽圮す。月船之を慨き、師（實際）をして恢復を圖らしむ。、師命を受けて彼に到る。室、懸磬の如し、上漏下濕、蘆竹床を貫き、膝を容るゝに地なし。庵宇空豁、唯だ壇上に一祖像を安ずるのみ。師茫然として去り、武溪に歸る。未だ門閫を跨がざるに、船、一瞥して曰く、老僧錯て儞を見る乎と。師、竦然、遍體汗流れ、即時に續燈に却回し、苦を喫し酸を嘗め、幾たびか寒暑を經て遂に再造の業を爲す。又た誠拙を邀へて佛日に住せしめ、力を戮せて圓覺を支持す。圓覺、法運を挽回する所以の者は、實に師と拙との鼎力也（原文漢文）

とある。斯樣に實際と誠拙との力によつて圓覺の法運が挽回したのであるが、しかしその原動力は何處に在つたかといふと、それは月船が、彼等を激勵し、鞭撻して、その事業を完成せしめたところにあつたので、結局は月船の力與つて大なりといはねばならぬのである。さればこそ、圓覺寺の僧堂には多年月船の墨蹟が掲げられてあつたといふこと、まことにそれは當然の話だといふべきであらう。

月船の偈は、前に引用した數首によつても知らるゝやうに、極めて鮮麗な文字に富んでゐる。その詩情の幽艶な點に於ては、臨濟曹洞の二派を通じて比肩するもの多くあるまいと思はれる。從つて彼の門下にも誠拙、物先の如き、その點に於て出色の作家を出してゐるのである。これ等の人々の外に異色ある門下としては、仙崖義梵の如き大巓宗碩の如き、方巖祖永の如き、いづれもそれ〴〵の方面に於て注目すべき法材であつたといふべきであらう。

仙崖の畫業は今更ら說かずともものことである。一部の仙崖畫集をもつて來て、大正昭和の一鬼才富田溪山人の所作と比較する時、溪仙が如何に仙崖の影響を受けてゐるかゞ極めて明白になる。この一事すでに彼の丹青の如何に偉大なる力をもつかは極めて明瞭だ。そして傳ふるところによれば、仙崖は十九の若齡から三十一歲の時、月船が世を終るに至るまで東輝庵において誠拙その他と共に、月船の膝下に參じてゐたといふのである。

大巔宗碩は、麻布の天眞寺に住止した、彼は松平不昧公の禪師として著名である。「武溪集」を出板したのは、不昧公の援助によつたものと見へて、現に不昧公の跋文がついてゐる。そしてそのうちに於て彼は月船に親しく近昵することが出來なかつたことを遺憾としてゐる。斯樣に月船に近昵することの出來なかつた不昧公が「武溪集」の出板を扶けたものは、おそらく大巔との關係に基づくものではなからうか。更らに方巖祖永は第二世賣茶である。八つ橋賣茶の名を以て、その方面および書畫の方面における彼の地位は、多く此處に說明するまでもなからう。

月船の書は、私はあまり多く見て居ない。嘗つて圓覺僧堂に揭げられて居たといふ小幅が、今現に、中川良長男爵の虛空庵に秘藏されてゐる。それは一度燒棄されやうとする御難を助かつたものだ。それは小幅ながらも、如何にも幽艶な書體、月船の詩偈さながらに情趣豐かなものである。

四

誠拙が月船の命を奉じて圓覺の佛日庵に入つたのは安永六年冬十月であつたといふ。月船が死に先立つ五年、誠拙まさに三十二三の壯年時代である。前にもいうた通り、その頃の圓覺寺は極めて衰運の狀態に陷つてゐた。だから僧堂などもなかつたのであらう。實際和尙と誠拙とが戮力して山內の氣風を革新するとともに、僧堂の構造にも着手したらしい。そして其處で四來の雲水を接化したのが誠拙であつたのである。斯くして彼の名聲は漸く昂つた。「聲價彌高、四衆雲集。南禪天龍、及遐爾招請、歲無虛日矣」と傳記には傳へてゐる。彼が幕命によつて圓覺寺を視篆したのは文化十三年、老齡七十一に及んでからであつたといふ。その時、京都の天龍寺から一山の衆徒が相議して、金襴の僧伽梨を贈つて來たが、それは開山夢窓國師が天龍寺の落慶に際して宮廷から賜はつた法衣の模樣に倣うたものであつた。その事實から推測しても、天龍寺と誠拙の

關係が窺はれる譯で彼がそれまで屢々天龍寺の招請に應じてゐたことが容易に想像され得るのである。

相國寺に至つては一層關係が深い。相國の源光庵には、彼の門下拙庵元章が住院して居た。そして拙庵は、あるひは僧堂建設、あるひは心華院中興等のことに奔走し、文政三年、僧堂の成るとゝもに、誠拙に結制開講を請ひ、且つ心華院をもつてその晩年を休養するの場所としたのである。だからその年六月誠拙が病にかゝつて遂に起たず、

時來人未レ來、興來人將レ行、閻魔大王令嚴、明日打爲二君相一行。

といふ一偈を遺して化を告げたのも心華院に於てゞあつた。

誠拙は文墨をよくした。私は嘗つてある處で彼の文珠菩薩の密畫を見たことを記憶してゐるがそれは殆んど專門の畫家の手に成るものでないかと疑はしめるやうなものであつた。中川男の虛空庵には寒山拾得の對幅がある。これは普通の禪僧ものと多く異ならない。卽ち手にまかせて胸中の磊塊を吐露する底のものだ。彼の書は多い。なか〳〵達者であるが、しかもそのうちに淸逸の趣を失はない。昨今頗る珍重される風があるとのことだ。

五

さて此處で問題を鎌倉禪と鵠林禪との關係に引き戻さうと思ふ。われ等の目標は、しかし決して教理、慣行等の專門的見地に亙らうとは思はない。それは飽くまで人的交渉の見地から門外漢的の觀察を下して見ようといふのである。

鎌倉禪、あるひは文字禪とは、月船および誠拙の門葉をさすのであるが、しかし誠拙その人がすでに天龍もしくは相國の僧堂において四來の雲水を接化したのであるから、從つてその影響がこの方面にも、深く及んでゐたことはいふまでもないところ、鎌倉禪に對する京都禪界の一角には、斯樣にして鎌倉禪の感化が、すでに深く喰ひ入つてゐるといつてもよい。

更らに遡つてこれを考へて見ると、後年のいはゆる鵠林禪の中心は、江戸湯島麟祥院の峨山慈棹和尙の門下であつたといつてもいゝやうに思はれる。それは峨山の下に隱山、卓州、行應といふやうな法將が揃うてゐて、それ等の門下がまた、みなそれ〴〵に人材が多かつたからである。現に「近世禪林僧寶傳」を書いた獨園承珠にしても、鎌倉禪と鵠林禪を頻りに辨じた眞淨宗詮に

しても、隱山の系統を引いた人々である。ところがこの隱山の師である峨山慈棹であるが、彼はまさに月船の手鹽によつて育てあげられた禪界の飛將軍なのだ。「妙心寺史」には、

鵠林下東嶺の後を承けて寛政、享和、文化年間に於ける我が一派は實に多士濟々の有樣であつた。就中その最も顯はれしものは古月下、月船の弟子峨山慈棹並に其法嗣隱山、卓州の二師である。

として、更に次のやうに叙說してゐる。

峨山は曾て白隱及び其上足遂翁、東嶺にも參じたのみならず、其の師盤城三春の高乾院月船について修養したのである。師は全く古月、白隱の禪機であるというてよい。又師は古月下を以て有名な日向大光寺翠巖の室にも入り、而して後丹波法常寺に居て古月下の大道にも參扣し、是に於て罷參の事を告げた。後屢々鵠林の門を通過するも更に參見するを欲せなかつた。吾天下の諸老を見るに、曾て一箇の我を指摘する者なし、されど未だ見えざる處のものは白隱のみと。因て此の事を師の月船に告げた。月船は坐ろに師の自負を喝破し自證を許さない所から、會々白隱の碧巖會が江府桃林寺に在るを聞き、師は謂へらく、吾此の老を見ざれば、大丈夫に

あらずと、遂に志を決し躍とし立ち、桃林寺に到り、白隱に謁えた。所で請益契はざるものあり、卒に白隱に隨待し松蔭寺に到り居ること四星霜、白隱寂を示すの後、師は武州永田の東輝庵に歸り、月船に服事してゐた。時に幕命を以て人材擇秡の住持地たりし江戸麟祥院の席を虛うするに際し、師は同寺の外護稻葉侯から懇請され造り住した。其時月船は峨山の爲め號を附した一偈がある。

峨山

疊嶂連岡來レ自レ岷、三峰突起摩二蒼旻一、好將二毛孔普賢境一、送與西川登眺人。

峨山は桃林寺において白隱に三度も打出されたといふことである。そしてこの三度打出の惡疎手腕に感憤してその會下に參隨するの決意を固め、月船にその旨を告げて、白隱の住庵駿州原の松蔭寺に出向いたのだ。「武溪集」に左のやうな「送二僧之二駿州一」の一偈があるが、それはその際月船が峨山に贈つたものではないだらうか。

白髮秋風笛裏生、雙方明月度二關城一、烏藤親問鵠林路、獨掌由來不二浪鳴一。

兎も角、斯樣な關係で峨山が、深く月船の陶冶を受けたものであることは極めて明瞭だ。更ら

に隱山であるが、これも亦實は月船門下というてもよい程の深い關係をもつてゐるのだ。隱山が月船の會下に參じて掌事の者にさへぎられ、容易に掛塔を許されなかつたに拘らず、遂に熱意を示して參學を許されたことは前に述べた。それは隱山十九歳の時であつたが、爾來幾星霜を月船の膝下に送つて、二十六歳の春、漸く他の濟輩と相伴うて諸方遍參の旅に出た。そして一應各地を遍歴した後また月船の許に歸らうと思うて、美濃に受業師老山を尋ねたところ、老山が自ら創建した梅泉寺に隱山を住ましむるに至つたのである。斯樣な次第で、隱山が峨山の下に參じたのはこの梅泉住院十許年を經過した後、即ち彼が三十を越して四十にも近い年頃になつてからのことである。隱山自身の月船に對する關係がすでに斯やうであるのに、更らに峨山と月船の間柄が前に述べた通りであるのだから、隱山の禪風が、月船と一層深い交渉をもつものであるといふことは多言を費さずして明瞭であらう。

隱山の下に備前曹源寺の大元孜元があり、大元の下に相國心華院の大拙承演、曹源寺の儀山善來がある。幕末から明治の初年時代に飛躍した臨濟派の禪僧は、この二人の手にかゝつたものが殆んどその半に達してゐるというてもよい程であつたのだが、この二人は亦相國寺僧堂において

誠拙の上足拙庵の提撕を受けてゐるのだ。特に大拙は拙庵に招請されて心華院に住院するに至つた程で、その關係は一層緊密であるというてよい。そして獨園承珠は實にこの大拙嗣法の上足であり、且つ大拙の命によつて心華院に留住した繼嗣であるのである。なほ「禪海一瀾」の著者として知られてゐる圓覺寺の洪川宗溫も大拙の門下で、大拙の命によつて久しく儀山の陶冶を受けた禪匠である。

鎌倉禪と鵠林禪との間には、實に斯樣な人的交渉があるのだ。しかし、それにも拘らず、兩者互に對抗する傾向のあつたことは、前に述べたやうな次第だ。一歩の差、遂に千里の隔を爲すものといふべきであらうか。

享保に生れた人達

——遂翁、東嶺、大典、蘭山——

「日本禪宗年表」を繰つてゐると、ふと享保年代に眼がとまつた。二年正月白隱松蔭入院とあり、すぐその次の行に遂翁生とある。松蔭中興の二世として白隱の後を承けた遂翁は、白隱入院の年を以て生れたものと見ゆる。それから中一年を置いて享保四年には大典生とある。大典とは蕉中顯常和尚だ。相國寺、南禪寺を董して碩學の職にゐた學僧であることは多く說くまでもなからう。更に一年置いて享保六年には東嶺生るとある、白隱門下の學匠として、學識の點においては白隱以上であつたらうといはるゝ東嶺、しかもこの東嶺の生れた年において、白隱の師であり、且つ後年白隱の意を受けて東嶺自身がその墓碑を修理した正受老人慧端が死んでゐるのである。遂翁といひ東嶺といひ、この廻り合せは、まことに興味が深いと思うた。それから享保八年には

蘭山正隆が生れ十年には峨山慈棹が生れてゐる。よく調べたならば、勿論この外にもなほ多くの龍象が生れてゐることであらう。しかしこれだけの名前をあげただけでも、如何にこの享保年代の前半期十年が、後年の禪界に飛躍する鳳雛を生んだかは極めて明瞭であらう。

享保年代はいふまでもなく、德川中興と稱せられた將軍吉宗の就職したばかりの時であつて、家宣、家繼二代に亙つて權力を振つた間部詮房、新井白石等が退職を餘儀なくされ、それに代つて林家の三代鳳岡の獻議が多く採用され、室鳩巢が幕議に參與するやうになつてゐた。いはゞそれは一種の革新時代でもあり、また白石その他の改革に對する復古的修正時代でもあつた。從つてこの時代が、制度、文物の革新に伴ふ精神的活躍の時代であつたことも當然の話であり、左樣な環境の下に生れた時代の子たちが、極めて活潑な精神的發達を遂げたことも亦多言を要せぬところというてよからう。

×

其處で話をまづ遂翁と東嶺に戻さう。遂翁と東嶺は白隱門下の二甘露門と並稱され、大器遂翁微細東嶺と呼ばれたと傳へられてゐる。おそらく大器放膽の性格が然らしめたものであらう、遂

翁には著述によつて法門宣布を企劃したやうな形蹟がない。彼は寧ろ繪畫によつて禪の幽旨を普遍化することに成功したやうだ。

繪畫によつて深遠な禪味を一般に普遍したいはゆる畫禪の新境地開拓の功は、勿論主として彼の師白隱に歸せねばならない。しかし白隱の畫が、あるひは遂翁によつて深く影響されたものではないか、といふ疑問が最近一部の間に唱へられてゐるのである。例へば仙崖研究の淡川康一氏の如き、

白隱が丹青を好むに至つた動機は如何、彼は最初、畫は作らなかつたが、時人の懇請により繪筆に親しむやうになつたと傳へられてゐる。然しその高弟遂翁より受けた影響を看過する事は出來ない。

といひ、更らに白隱の畫技修養について、

白隱の畫が當初狩野派に私淑したことは疑なく、杖を曳く橋上の行脚僧、山水に於ける帆船の構圖、驢馬に跨る人物等、その意匠は悉く探幽、養朴以後の粉本に依賴した樣である。特に享保の初年三十五歳前後の作品は全然狩野派の臨寫に終始し、その畫題も自から福祿壽、出山釋

迦、觀音、達磨、維摩、文珠等が多く、これから所謂中年畫の時代に進んで、初めて彼獨自の畫題を略畫的に取扱ひ、廣く大衆化したやうである。この事は彼の境界が、愈々十字街頭に說法す可き時に直面したのを思へば、一層意義深いものがあらう。しかし中年時代には一方繪畫的表現にも成功することを努めた結果、その線描、賛語の書風等がいぢけた樣である。これが老境に入ると共に自然圓熟し、更にその六十二歳の時には遂翁の相見があり、勢ひこれからも影響を受けて、前の細書は太書となり、前の濃墨は淡墨、溜墨へと進化し、書亦鋭鋒を收めて圓滑雄渾の度を增して來た。また寶曆元年六十七歳、備中よりの歸途、京都に駐錫するや、當時二十九歳、研究の過程にあつた大雅の禪法を問ふに逢ひ、兩者は之を契機にして風交を結び彼は大雅の贈つた舶來の松煙墨を以て墨池に臨んだこともある。

と說明してゐる。

遂翁の畫技についても、淡川氏の所說が簡明にして要を得てゐるやうに思ふ。だからそれも此處に借用して、無用の說明を加へることを差控へやう。

遂翁、法諱は元藘、別に浮島と稱し、年三十餘にして初めて白隱の門に投じた。平素不拘ニ細

行、忽ニ略小事、不ニ甚坐禪、不ニ甚看經、居無ニ定處、到處伸レ脚而臥、一醉以爲レ快、好ニ碁與畫、優遊自得とは近世禪林僧寶傳が傳ふる彼の行錄の一節、近代の宗匠中天分の畫才を有し、本格的な畫境を展開したのは、遂翁に初まる。その作は白隱風であるが、白隱よりも遙かに藝術的であり、技巧亦熟練し、描線も白隱の如く怒張せず、寧ろ逸然性融、心越興濤に匹敵し、これを檗僧に比すれば、經營、布置、骨法、用筆等數段の上にある樣に思はれる。その描風は大體狩野派と見られるが、大雅からもある程度の影響を受けたやうである。仙境、幽玄の趣を體得せんとして富士に登ること數回であつた大雅は、途次自から遂翁を訪問し、畫談を交へたことであらう。(中略)現存する遂翁の養老山水圖には大雅の描法が多く認められる。然しその大機の悟境は、雄渾な筆觸、ふくやかな線描、壯重な墨色に獨得の作品を生み、殊に天與の藝能は、勢ひ彼をして細密な技巧を要する宋元畫風に基いて起つた本格の禪畫をも描かしめ、香嚴擊竹、靈雲見桃、寒山拾得等はその得意の畫題であつた。

たゞこの際多少の蛇足を附加するとすれば、それは大雅が、遂翁の許にしば〳〵參禪した事實があることである。それだけ彼等の關係は極めて緊密なものがあつたといへる。更らに淡川氏は

東嶺についても、左のやうな叙說を行つてゐる。

白隱の門下に開悟得法したる龍象は極めて多いが、遂翁と共にその二上足と稱せられてゐるのは東嶺圓慈である。彼は學問の上では白隱以上の力量があつて、白隱が未だ說いて盡さなかつた幽意を闡明して禪門の光彩を發揚した明師であつた。殊に法の爲には至つて忠實で、四弘誓願丈では足らないといつて、普賢の十大願を起し、常に普賢三昧を行じて居た。遂翁の大機に對し、彼は微細の東嶺の稱がある。しかし殘された墨蹟類を通じて見ると、彼こそ大機とでもいひ度い程、書畫共に豪放磊落である。白隱の兒孫にして畫を作つたものは多く白隱の構圖を模倣してゐるが、東嶺の作品はその多趣偉大な人格と豐富なる獨創的精神を基調としてゐる。「價値三千大千世界」「顧鑑咦」「珠じやぞよ磨けば光るもの持て、そのなりかばね何の眞似じやひ」等と自賛を入れた玉の畫はその得意とする所であるが、これは彼の述懷とも見ることが出來る。宗門無盡燈論の次の一節を讀む時、單なる略畫として看過し得ないであらう。「……大弄ニ明珠一、刹那不放、或得或失、正念難ニ相續一、悲懼塞レ胸、坐起不レ安如レ是半百日、忽然落節、擊ニ碎明珠一了……」また禪家に愛誦される丹霞和尙の玩珠吟や、良寬和尙の法華讃に見へる

「一顆明珠直大千、持呈佛陀証眞率、師資妙契奉與納、誰至此間容毫髮」が想記される。東嶺には外に多く不二庵主の別號を以て畫いた主人公の圖がある。その讃語「頂門揮斂、脚底鍊丹、三世放下、十方聽觀、主中主我何以莫受身心境法瞞」は無門關第十二則なる巖喚主人の公案を說いたもので、また彼の假名法語快馬鞭にも「すておかず、たゞあしもとにきをつけてありや〳〵ととふ主人公」と歌つてゐる。ふくべも東嶺の畫によく描かれてゐる。趙州錄に所謂「僧問如何是祖師西來意、師云、東壁上掛胡蘆多少時也」から出た其の讃語、「趙州東壁掛胡蘆」は良寛の法華讃譬喩品にも次の如く用ゐられてゐる。「昔時三車名空有、今日二乘實也無、咦、趙州東壁掛胡蘆。」彼は特に彩管に親んだ譯ではないが、またそれだけに何物にも捉はれず、悟境を畫に天眞より流露せしめる餘裕を持つてゐた。この點、意匠の獨創、飄逸な事では素より比較にならないが、その落筆磊落は、無法の法より迸り出た仙崖の畫に通ずる一面がある。また筆札に於ても、彼は表現するものを自分で持つてゐた。或は卒意の書かも知れぬが、心の働や天地の働を達觀してゐたことが明かに認められる。

兎も角、東嶺は如何なる事にも氣のつく親切家であつたやうだ。だから晩年の白隱は彼を最も

重寶としたものらしく、自分のために建立された伊豆の龍澤寺にも、まづ東嶺を据へてその住持としたのである。その點に於ては遂翁とは全く反對の性格を持つてゐたのであらう。遂翁は成るべく白隱と面と向つて相對することを避けてゐたやうである。松蔭寺の後住と定まつたのも、東嶺等が彼を白隱に推擧した爲めであり、且つ後住に決まつてからも、白隱と同居することを避けてその最後に至るまで他に別居してゐたと傳へられてゐる。だから同門の關係においても、白隱老衰後に於ける後進の提撕は東嶺が主としてこれに任じ、遂翁に何か聞くものがあれば、去つて東嶺に聞け、我れ何をか知らんやというてゐたさうで、現に峨山慈棹の如き、「我從鵠林老漢僅四年矣、以他老憊入室時或不協故就東嶺和尙扣之」といひ、また「五位兼中止以上、我就東嶺和尙質之、是時微東嶺竟不能盡餘蘊」ともいうてゐる。斯樣にして鵠林門下における東嶺の地位は頗る重要なるものがあつたのである。彼は亦著述においても相當の效果をあげてゐる。「宗門無盡燈論」「神儒佛三法孝經口解」「達磨多羅禪敎說通考疏」「五家參詳要路門」その他世に行はれてゐるものが多い。遂翁は寛政元年十二月七十三歲、東嶺は寛政四年潤二月七十二歲で共に前後して長逝した。

×

同じ相國寺中の人でありながら、獨園承珠の編輯した近世禪林僧寶傳における大典顯常の記述は簡單を極めてゐる。しかし彼は近代禪林に於ては五指のうちに屈して然るべき學僧であらう。彼の著述は實に七十餘種に上るといはれてゐる。妙心寺の無著道忠が百八十に比較すると、やゝ遜色があるといふべきであるかも知れぬが、曹洞の卍山、面山および黃檗の高泉等と相並んで、これ等の五人は、德川期において最も多く文字を驅使した禪僧といふべきではないだらうか。

大典諱は顯常、また梅莊、蕉中、北禪ともいうた。近江の人、儒醫今堀東安の子、初め黃檗に學んだといふことであるが、享保十三年、十歲の秋、相國寺塔頭慈雲庵の獨峯慈秀和尙の門に入つてその弟子となつた。

この獨峯和尙が死んだのは寶曆六年九月で大典三十八歲の年であつた。この時はすでに獨峯が退隱して彼が慈雲庵の住持となつてゐたのであるが、しかし師翁がこの世を去るとゝもに、彼も頻りに寺務繁多の住持職を退隱したいと思ふ心が動いて來たのである。そして三年の喪が過ぎた寶曆九年になつて、それを實現すべく願ひ出で、結局、相國寺に於ても暫らくこれを默認することになつた。この閑散時代は十數年續いたといふことである。そして再び慈雲庵に歸つたのは安永元年で、彼が五十四の年に該當する。かくて安永八年相國寺に視篆し、更らにその六年後、天明四年南禪寺住持職として紫衣の階級に昇進した。

大典が朝鮮修文職に任ぜられて碩學祿を受くるに至つたのは安永七年のことであつた。碩學職は家康の帷幄に參加した金地院の以心崇傳が五山の僧侶に對する政治的施設として創始したもので、天龍、相國、東福、建仁の四個寺の學僧中からこれを任じ、主として朝鮮に對する修交文書を掌らしめたのである。そしてそのうちから、一人を選んで對馬にある以酊庵に滯在せしめ、朝鮮と直接交涉の任に當る對州藩の國際事務を監査せしめた。これを對州御用と稱して、非常な名譽としたものであるさうだ。

大典は天明元年にこの以酊庵輪住の番に當つた。同年四月發、五月廿二日對州着で其處に行つたが、歸つたのは三年七月であつた。この間の對州生活の狀況は「北禪詩草」第二、第三の兩卷に收錄された諷詠によつて想像することが出來る。

彼が詩友として最も交りの深かつた一人は台敎の六如上人であるやうだ。彼等は詩の上の交は

りばかりではない、一時協力して、支那の佛書中支那にはなくして日本にのみ殘つてゐるもの、及び日本の代表的な佛典一百餘部、七百餘卷を支那に寄與する計畫を立て、その斡旋を長崎奉行に仰ぐべく京都町奉行に願出でたことがある。しかし當時の官僚は斯やうな計畫の動機及び效果を理解することが出來ず、その儘何の措置も取らなかつたので、それ等の典籍は相國寺の倉庫中に久しい間塵まみれになつて居たといふ事だ。

大典はまた畫僧月仙とも非常に親しい間柄であつたらしい。それは勿論、月仙が知恩院の役僧として京都に居た時代の交際から始まつたものであらう。しかしその後月仙が伊勢山田の寂照寺に遷住してからも、少しも變らず、碩學職の用務を帶びて江戸に往來すること十數回に及んだといふ旅中、その往復の度び毎には山田に立ち寄つて、常に寂照寺に遊んだやうだ、その時々の詩は「北禪詩草」その他に在る。斯やうな交際であつたから、月僊が京都に出て來ると、すぐ相國寺にやつて來たものであらう。大典が、豫め新しい屏風を作つて置いて、月僊に揮毫させた時の詩がある。

月仙上人自レ勢至、豫製二屏風一乞レ畫二山水一、登時下レ筆、作二林木狀一、俄而轉爲二蘭亭圖一、布

置得レ妙、忻然賦レ之以呈、

金錫翩々過二梵臺一、素屏新就待二君來一、已知會境胸中在、忽使二蘭亭筆下開一、修禊人依二茂樹一集、流觴水並二幽巖一廻、自緣二能造隨レ心現一、不レ用丹青徒說レ才。

揮毫を乞はれるとその突嗟に筆を下した月僊の風貌も見るやうであるが、その一木一石が見る見る蘭亭流觴の密畫に變つてゆくのを見て、欣然この詩を賦した大典の樣子もまた躍如たるものがある。この外、對馬の以酊庵滯在中、夢に月僊がやつて來て、梅の圖がほしくないかといふから、ほしいが手に入れる方法がないといふと、月僊が懷中から無造作に一幅を取り出したが、これを披けば「山水間一樹梅花的歷風致可愛」ものがあつたというて、詩を作つてゐる。それ程この兩人の交際は深いものがあつたのだ。

更らに學的系統からいふと、彼は長崎の大潮から啓發されたところが多かつたやうである。おそらくそれは大潮が黃檗の役僧として宇治に滯在した時代に就學したものであらう。そして大潮が長崎に歸つてからも、書簡によつて屢々教を乞ふてゐるのである。その往復の文書が大潮の「魯寮文集」中に收錄されてゐる。彼は大潮の門人である宇野士新にも就いたらしく、士新の著

述の整理その他に任じてゐる。その關係から士新の門下片山北海とも交り、その庇護者のやうな地位に居たらしい。

天明八年の京都の大火によつて相國寺も燒け慈雲庵も全燒した。よつてその再興を經營するとともに、學僧としての彼らしい計畫を企てたのである。それは燒失した書庫を再興するため典籍の募緣を行つたことである。そして支那に對する典籍寄與を思ひ立つたのは、實にこの計畫の繼續であつたのだ。

その後の大典の生涯は一路平且であつたやうだ。そして天明の大火から十餘年を經た享和元年三月、八十三の長壽をもつて世を終つた。

×

蘭山正隆は、豐前の開善寺に居り、靜泰院に退隱し、主として九州の一角にありて化を布いたのであるが、しかし生れは東北、出羽山形の產なのである。勝因寺台禪和尙の手で落髮、十七八歲のころ月船和尙に參じた。それから丹波の法常に大道文可に見へて、其處で相當修業を積んだらしい。

丹波の法常寺といふのは一絲和尙によりて創建された寺で、紫衣の格をもつ由緒ある寺だ。その住持大道は、元來、武州の百姓の子、しかも大分年をとつてから禪門に入つた。初め光林寺の節外和尙に參じ、其處の飯頭となつたが、經典の講義にもあまり出頭せず、庫裡の片隅に打坐してゐた。そのうち節外の法嗣靈源から手紙をつけられて濃州の龍光に行き、次いで甲斐の惠林に閒居し、更らに駿州の淸見寺に於て陽春和尙の指導を受け、其處で文字の學を仕込まれたらしい。九州に賢巖を訪うたのはその後のことである。賢巖の手を離れてからも大道は諸方を巡訪した。薩摩に行き、日向に行き、四國に行き、近畿を廻り、日向では古月及び古月門の翠巖、四國では盤珪の後を承けた逸山、近畿では黃檗の慧極等と切嗟商量した。そして結局法常の太翁和尙から法衣を授けられることになつた。斯樣な經歷をもつてゐるだけ、大道の後進應接の方法は極めて惡辣峻刻なものであつたと見へ、當時世間では「丹波の鬼大道」というたさうである。

其處で蘭山は何年かの修業を積んだ。そして大道の命によつて九州に古月の門を叩いた。當時日向では、古月及びその法嗣翠巖、翠巖の嗣拙堂元敬とが鼎足して名聲を馳せて居た。因つて蘭山はこの三人について、更らに一層の修養を積んだのである。古月が有馬侯の請托によりて筑後

に福聚寺を開いた際、蘭山を其處に住ましめようとの意があつたが、彼はそれを辭して豐前の開善寺に師家となり、遂に其處に住持することとなつた。

蘭山は正邪の念の極めて判然とした一種の潔癖性をもつてゐた人でないかと思はれる。福聚寺を辭したに付ても、その裏面にある種の權力爭奪關係があつたことが、彼の氣を傷らしたものであるやうだ。また開善寺を退いて靜泰院を開いた際にも、領主小笠原家の執政丸田登といふものが、食給せざるを憂ひて密かに人をやり、官穀を請はしむることを進言せしめたが、蘭山は一言の下にこれを叱り飛ばした、といふ話もある。また長崎に遊んだところ、授戒懇請の士民群集して、その寄謝は數ることが出來ぬ程の量に上つた。しかし蘭山はそれで一切米を買うて貧民に施さしめた。都會に利を漁る者の寄謝は見るも眼のけがれだといふのであつた。

彼の筆札を見ると、しかし溫藉和樂、少しも神經的なところがない。奇趣なく、拗捩の點がなく、筆鋒はあくまで正法に從つて、まことに堂々たるところ、それは正しく士君子の書だとでもいひたいものがある。その點から推して見ると、彼の正義感は決して偏傾したる潔癖性に根ざすものではあるまい。正しい道義觀念に培はれて、その結果が、少しでも陰翳のある疑をもつもの

は一切これと相伍するを好まぬといふ性格を生むに至つたものであらう。「妙心寺史」には、

因に言はん、塔頭衡梅院方丈の正面（椽側）の額四河一源（一源とは六祖、四河とは四派）と書き遺された筆跡は今尙炳として餘光を輝かしてゐる。

と、特に彼の墨蹟に言及してゐる。蘭山は寛政五年、妙心の龍安に招請されて碧巖錄を評唱したが、その會中微恙を示し、遂にその儘長逝した。峨山慈悼については、月船、誠拙を語る際に於てこれに觸れたから、此處にはこれを省略する。

なほこの稿を草了してから、年代を繰つて見ると、蘭山の生年を享保とすることは、聊か妥當を缺くやうだ。しかし此處には、暫らく「禪宗年表」の記載したところによつて、この儘にして置く。

洪川和尚のこと

大正年代、朝鮮の政務總監になつて死んだ下岡忠治氏は「近世禪林僧寶傳」の著者である相國寺の荻野獨園和尚の禪を稱揚してゐた。現に樞密顧問官である伊澤多喜男氏は、白山道場の老主であつた渡邊南隱の人格に敬服してゐる。下岡伊澤の兩氏は、政治上私交上においては、極めて親近な間柄であつたやうだ。それにも拘らずみなそれ〴〵その近眤するところによりて、見るところを異にしてゐる。斯樣な事態は、一面からいへば近代の禪林にも、その人なきにあらざる事實を證明するものというてもよからう。獨園の同門であり、且つ長く鎌倉の圓覺寺を董して、獨園をして「關以東之禪風歸二和尚手裏一」といはしめた今北洪川の如きも臨濟宗においては近代出色の禪師であつたといへよう。

洪川の生涯において人口に膾炙する二つの事實は、中年から禪門に入つたことと、禪門に入つてまづ第一に提撕を受けた相國寺大拙和尚の鉗鎚が、惡竦を極めて、さすがの彼も肉瘠せ骨衰へ

て、悄然見る影もない狀態に陷つたといふ辛參苦究の事實である。

最初の中年にして禪門に入つたことについて、彼の語錄、詩偈等をあつめた「蒼龍廣錄」の編輯者は、「今也法運澆季、機根下劣、僧而歸俗者滔々有レ之、俗而投レ禪者寥々罕レ觀、何況儒而入レ禪者乎、嘗聞二師投レ禪之機緣一、索二諸今古一、果有二幾人一」というてゐるが、實際彼は禪門に投ずる以前、すでに大阪において一個の儒者として立つてゐたのである。文化十三年、大阪の郊外西成郡福島村今北氏の三男坊として生れた彼は、藤澤東畡、廣瀨旭莊等に學んで、折衷學派を唱へ、十九歲から二十五歲まで大阪中之島に家塾を開いてゐた。そしてその間には妻帶もしたのであるが、如何なる理由か、その生活に滿足することが出來なかつたものらしい。「蒼龍窟年譜」には、

一日講二孟子一、至二浩然章一、大レ聲曰、孟子說二浩然一、我行二浩然一、門人皆驚二異之一、自レ是抱二脫俗之志一

と記してある。妻帶は、兩親がこの脫俗の志を翻さすための策であつたと傳へてゐる。しかしこの策謀も豫期の効果を奏せず、結局、世念を斷つて一意佛門に走つたのであらう。それは彼が二十五歲の天保十一年九月のことであつた。

さて、それからが、彼の辛參苦修の時代だ。「蒼龍窟年譜」の記すところに據ると、

十日、(九月)師登萬年山相國禪寺、拜大拙演和尚、執師資之禮、和尚授以鵠林隻手則。師承意刻志、孜々兀々。或七日斷食、獨坐攝心、或至北野菅廟、凝坐拜殿廊露地、七通宵淬礪工夫、而服勤近事者三閱月、和尚召師曰、爾來試之、汝志願較些子、宜祝髮而參堂、十一月二十三日剃髮受戒。

というてゐる。即ち約七十日の試驗に及弟して、大拙門下の數に入つたのだ。

時演和尚日講佛光國師行狀、師在末席拜聽。一日聽至國師十二歲、侍父遊山寺、聞僧吟竹影掃階塵不動月穿潭底水無痕、覺警省處師忽徹肉臟腑、洞然如消凝膏物、頗覺省力。講后入室、將呈所解、和尚怒罵便打。

これは勿論禪家の常道であらう。しかし切角その所解を述べんとするのに、一言も物をいはせず叱咤鞭打するのであるから耐らない。路次人なきところ、昭堂燈下、物靜かなる邊、若い洪川は常にひそかに眼を拭うたといふことである。しかも「鬼大拙」といはれた承演和尚の惡竦な鉗鎚は、容易にその手を緩めない。

此夏(翌年)演和尚閑居僧堂侍眞寮養病、獨許師入室。師看病之暇、刻意參究。有元規上座者、抱道人也、與師留護僧堂、看師刻苦、時來慰問、打古人話、着激勵、蓋益友也。(此僧後住萬山心華院嗣法演和尚獨園和尚也)師亦自鞭逼精勵刻苦一日甚一日、晨參暮叩如救頭燃。演和尚依然罵倒、又打倒、而不垂一語、苟見師面、忽發怒色、恰如讎敵。

元規上座といはれた後の獨園和尚が、古人の刻苦辛參を語つて洪川を激勵したことが、その當時、如何に骨身にこたへて嬉しかつたかは、後年の彼等二人の親近ぶりから、これを推察することが出來る。獨園自身がその頃を回想して「大拙惡竦接兄、兄無少屈色、苦修練磨」と「蒼龍廣錄」の序文において述べ更に「與蒼龍法兄同事於無爲大拙、俱受惡竦鉗鎚」と彼等の苦しい修業時代のことを說いてゐる。しかしその頃は洪川も最早や相當に修業が積んだので、最初のうちのやうに眼に涙を見せるといふやうなことはなかつたらしい。

師彌恭敬服事不毫措意、至烹饌撫背鋤圃採薪汲水灑掃、忘勞就之、只恐不周。當此時、師欲言莫可言、欲呈莫可呈、進不得、退不得、伎倆維谷、知見皆忘、怏々欝々、飲食無味、形容憔瘁、面色如土、人皆謂、拙公禪病革、必近日斃矣。

此處に拙公といふのは洪川のことである。當時彼は守拙といふ名を大拙から貰つてゐたのである。斯樣にして苦酸幾年、漸く大悟の時機が來た。

一夕當二誠拙和尙月忌一、演和尙旋レ院而寢。師私意、他人不レ知我純工殆熟、大悟時至矣。乃深夜獨入二禪堂一、抖二擻精神一、確坐攝レ心、眼不レ交レ睫、淸々純熟、不レ知二窓白一、只恍惚覺二曉版聲僅入一耳已。不レ堪二怡悅一、愈益提二撕話頭一、凝坐體究、終日不レ出レ堂、粥飯皆忘。比レ至二黃昏一、忽然前後際斷入二絕妙之佳境一、眼耳惺々、如二眼耳皆無一。須臾胸次轄然、開二眞眼耳一、見二大好事一、聞二大好聲一、自知自得恰如レ飲二甘露一、從前之疑團、從前之學碍、徹レ底一時雪解氷釋。忍俊不レ禁、不レ覺不レ知衝レ口連叫曰、我神悟矣、百萬經典日下燈、也太奇、也太奇。乃說レ偈曰、疎濶孔夫子、相逢阿堵中、憑レ誰多謝去、好媒主人公、卽忙走レ院呈二見處一、演和尙始微々笑。

斯樣にして洪川は始めて鬼大拙の笑ふ顏を見たのである。その場の光景を「年譜」の編輯者は更らに次のやうに叙說してゐる。

師曰、某嘗聞二禪有二妙悟一、今日始知古人不レ欺レ我也。演和尙曰、儞莫下以二一且之慶快一爲レ是、自レ今須レ鞭二四句誓願輪一、煥二發無量妙慧一、透二過無數因緣一、而識得末後別有レ生涯、無慧定坐邪定

也、愼勿二無念無心了一。其餘淳々含レ淚警囑、自二昏時一至二初更一、師感承拭レ泪而退。自レ是每二師入室一、演和尙拶以二數段因緣一。或直前看破、或一二日透見、每々擧措快活、自然口吐二妙言一、機呈二妙用一。

×

鬼大拙の惡辣な鉗鎚は、斯樣にして洪川が內藏してゐた悟性の最初の外皮を破つたのである。愈剝愈光、愈磨愈明、その語を以て彼は洪川を警醒した。そしてこの愛弟子を備前の曹源寺儀山善來和尙の膝下に送つて、更らに深く參究するところあらしめたのである。儀山は大拙と共に、隱山門の太元孜元和尙に學んだ一方の禪將であつた。後年、洪川が「特賜佛國興盛禪師儀山和尙道行記」を作つて、

鵠林法道、一傳爲二峩山禪師一、山出二四哲一、說法如二雲雨一、橫二溢於扶桑一、就レ裡、卓洲隱山二禪師門下、多士濟々、抗二衡於天下一、風蜚雷激、便出二隱山之門一、而盛二化于關西一者、曰二妙覺果滿禪師太元大和尙一、儀山禪師者、其得法之高足也。

といひ、

師龐眉雪毛、玉骨埀レ額、眼光射レ人、狀如ニ應眞一、資禀溫和、如ニ春風之藹若發ニ育萬物一、度量寛弘、如ニ大海之汪洋呑ニ容百川一。而其室中接ニ來學一也機鋒峭拔、意思淵妙、實難ニ思議一。於レ是乎、師應ニ諸刹之請一、凡二十四座、會毎衲子聚ニ鎚拂下一者、或三百或四百、遠近緇素悅服、國司歸崇、吾宗叢席之盛、近世所レ未レ有也

というてゐる。以つてその風貌を推測することが出來る。思ふに大拙は、霜威酷烈な自己の鉗鎚手段とは異つて、春風駘蕩、大海汪洋の風ある儀山によつて、更らに異風の鉗鎚を洪川に向つて下すことを望んだものであらう。洪川は儀山の日常について、更らにこんな風に述べてゐる。

師平常應事接レ物、一以ニ無功用智一待レ人、洒々落々、專示ニ向上作用一、毫無ニ凝碍一、無ニ蹤跡一、雖ニ常隨侍者一、決不レ能レ窺ニ師眞行履一矣。

無功用智を第一義として洒々落々、少しも物に凝滯しなかつた儀山は、また常に衆に示す語としては、

胸天月淸、心地波平、朝奏ニ天長地久曲一、夕唱ニ國泰民安歌一、此外我無ニ語句一、又無ニ一法與レ人

といふのであつたともいうてゐる。

當時儀山の感化はなか〳〵廣汎なものであつて、幕末明治にかけての著名な臨濟派の禪將は、すべてその門を潛らぬものがないといふ程であつた。だから彼の法を說いた曹源寺の栗棘僧堂は天下の雲水が蝟集し來る一の標的であり、從つて儀山のこれに對する執着も强かつたものと見へる。初め曹源寺のあとは弟子の寶船に嗣がしめたが、幾何もなく物故したので、二度目には大丘といふ弟子を後に直した。しかし大丘も亦幾年ならずして長逝したのだ。依つて三度目には、寶船の弟子の暘谷をその住持としたのであるが、何というてもまだ年が若い、だから彼の苦勞するところは如何にして栗棘僧堂を維持するかであつた。彼は一日暘谷その他の弟子を呼び集めて斯ういうた、と洪川が「儀山大和尙道行記」において記してゐる。

吾山僧堂者、先師果滿禪師剏ニ開之一、始行ニ叢規一、老僧相繼黽勉至ニ于今一、前後已七十年。想暘谷道行未レ熟、不レ堪ニ其任一、老僧沒後、若至下鎖ニ僧堂一、缺中廢叢規上、不ニ啻埋ニ沒先師之功業一、吾宗之危難亦可レ思矣。誠レ旃愼レ旃。恁麼時節到來、必越溪謙、洪川昷、牧宗壽、獨園珠、滴水牧等五大老中、屈ニ請一師一、汝等輔ニ佐之一、興ニ行叢規一、莫レ令ニ中絕一。孤ニ負此意一者、非ニ老僧法乳下一、思焉。

これが遺言であつた。彼は明治十一年十月二十八日に長逝したのである。いづれにしても儀山

が此處で五大老というてゐるこれ等五人の門下を持つといふことは、全く大したものといはねばならぬ。越溪は妙心寺、洪川は圓覺寺、牧宗は大德、獨園は相國、滴水は天龍といふ風に、いづれも天下の巨刹の主であつたことはいふまでもなく、また明治の初期に於ける有力なる禪匠で、今日の臨濟派は、殆んど大部分これ等の人々の法系をひいてゐぬものはないというてもよい程である。その點から見て、儀山善來の存在は、近世の臨濟門においてはまことに大なる勢力であつたといはねばならぬ。

洪川は儀山の下に三十二歳から三十八歳までの間を過ごした。それから相國寺、天龍寺にゐたが、そのうちに大拙和尚の遷化に遇ひ、安政五年、四十三歳の秋、周防岩國の永興寺に迎へられて、その翌春から其處に住持することとなつた。爾來明治八年まで十餘年の間、其處に留まつて居り、彼の主要な述作「禪海一瀾」を著して、儒禪一源の素論を强調し、學者の間に是非の波瀾を捲き起したのも、この岩國の永興寺時代であつたのだ。

×

幕府の長州征伐に際しては、長州支藩の岩國も人心動亂の極に達したといふまでもない。城

下の市民はみな家財を纒めて避難するといふ騷ぎであつた。しかし洪川はその間にありて少しも動ぜず「貧道、開祖と共に寺を枕として斃れんのみ」といひ、

殺レ魔殺レ佛、五十一年、末後無寃、清風亘天。

といふ遺偈までも用意し、寺内の大衆に對しては、「汝等速かに遁げ去りて後圖を作せ」というて、たゞ一人踏み止まる意氣を示した。

明治維新後は百事一轉、八年五月、彼は大教院の召命によりて上京、臨濟黄檗十宗の總黌々長に推薦された。そしてその年また圓覺寺を主管することゝなつたのである。圓覺遷住については當初彼は固辭して受けなかつたと「年譜」にいうてゐる。しかし懇請數回に及んで、彼は私に考へた。「凡そ物の隆替は、人事を盡すと否とに在る。かの鹿山（圓覺）は是れ吾が乃祖父開榛之道場である。今、一門斯くの如く人に乏しきを知るに拘らず、之を强辭するはこれ好兒孫の志情と謂ふことが出來ぬ。一山すでに人事を盡して來る、余不敏といへ共、亦敢へて吾が人事を盡すべきだ。そしてなほ之を補ふに足らねばこれ命なり、强ひてその勞を遁るゝは、乃祖の冥鑑に對して相濟まぬ譯だ」と、此處に意思一決、遂にその請を受諾したといふのである。

「年譜」の編者が圓覺を以て洪川乃祖父開榛之道場といふのは、おそらく遠くは夢窓國師、近くは月船、誠拙の圓覺僧堂再興を意味するものであらう。誠拙が相國心華院の中興たることは、さきに誠拙を說く際に述べたところ、そして洪川の師大拙は心華院に住んでゐた。だから圓覺は、彼にとつて決して他人の家でない。その信念が、彼をして圓覺遷住を決意せしめたのであらう。

偈成

高レ枕閑眠閑道人、迎レ新送レ舊亦何因、竟被二一百僧伽劫一、擡二起法身一祝二色身一。
曉欣二新歲一出二眞觀一、淑氣靄然眼界寬、豫樂鶯啼花綻日、湘江風月亦親看。

これは翌九年、卽ち瑞鹿山主となつて最初の新年を迎へた時の詩だ。勿論、その年の新春は東京に於て迎へたものらしい。黌長としての職責が、彼を東京に留まらしめたのだ。しかしその春には圓覺に於て小會があるので、その時の光景を豫想しながらこの詩を作つたのだといふことである。そして更らにその翌十年の秋には管長及び黌長を廢止することになつたので、彼は漸く帝都の黃塵裡から解放される身になつた。

明治丁丑秋、予解二教院黌長之職一還二于鹿山舊棲一、本分有志衲子十數輩、已挂レ錫而乞レ受二

予竹篦一、有感而作。

曾開二雜鋪一賣二京塵一、臨濟正宗大罪人、今日歸來舊氈坐、自嘲自悔黑鄰皴。

その後の彼の生涯は、僧俗參徒の應接と、遠近の招請に應じて禪を說くことであつて、全く餘念がなかつたやうだ。そして明治廿五年一月十六日に寂を示した、世壽七十七、法臘五十二と傳へられる。

×

夫叢林之有二選佛道場一、楢如二農家之有二沃田一、以二此場一培二養佛苗租稼一、以爲二衆生依估之福田一、故佛法社會、不レ可二一日無一之矣。於戲法道所宰、惠命所關、不二亦重一乎。

とは、洪川が「圓覺寺禪堂再建發起勸進帖」の冒頭の文字である。まことに彼は徹頭徹尾僧堂の人であつた。だから「蒼龍廣錄」詩偈之部を見ると、僧堂に關する詩はなか〳〵多いのである。

僧堂歲旦

破衲春回栗棘中、飽喰二雲餅一氣如レ虹、自レ今三百六十日、好震二威雄一向二大蟲一。

これは曹源寺の栗棘僧堂に於ての作だ。それから彼が周防の永興寺に行き、自ら僧堂を再興し

て海雲堂と名づけたについては、左のやうな作がある。

壬戌歳且偈今玆於永興寺有新營築禪堂之志故三四及

出窟金毛百無畏、扶宗大志和春新、乾坤自是好時節、好集人材轉法輪。

石大黒天獻鉢

禪堂地盤營築時、師亦與衆擔運搬土砂次、踏著小石喫顚、師笑把其石熟視之、髣髴大黒天姿、因收之安置、爲禪堂護法尊。待者記之

現脚下來、護持大法、誓願無量、廣濟渴劫稽首大功德尊天。

開單日提唱佛光錄首語

開發福田種佛苗、佛光法道未寥々、看遶山下五龍水、欲教秋收占富饒。

明治八年から十年に至る湯島麟祥院の總費の生活はいふまでもなく、後進の人材を養成する扶宗の轉法輪であつたが、更らに、專ら圓覺を主董するに至つてからも、その僧堂再興を計畫した。相之鎌阜有圓覺伽藍、六百年來湛智水、勤禪功、養育佛苗租稼處、名正法眼堂、所謂選佛道場也。乃係予開山國師創立、爾後夢窓國師中興之、月船禪師再中興之。古來明眼宗師陸續

出興于此。近來宗風下衰、師範乏人、殆鎖禪關焉。何幸哉、海西有國師末裔蒼龍老漢、曩應江湖請、携鉞斧來住此山、忽憑四衆荷負之優渥。古道恢復、祖風春回。抱道衲子、有道居士、接踵叩關、既成一叢林(中略)唯患道場狹隘、且往々就敗頹。故老漢發志欲擴張道場、俾衆得安禪之便

洪川はこの「勸進帖」を發して、淨財を募り、遂にその建造を成就したのである。

彼はまた近代の詩僧でもあつた。

我在俗修文日、文藤東畯、詩廣旭莊、就此二先生學、而猶歉然于心。脫俗後、經歷四海求僧家其人、當日無詩文章之聞師、唯每拜聽宗師提唱古尊宿語錄、覺其可喜者、間有之、竟選擇古今、偈歌雪竇虛堂禪師、詩慕蘇東坡管茶山二子。

とは「蒼龍廣錄」の編輯者に向つていうた彼の語である。彼の詩が、普通禪僧の詩偈に比して流麗淸淡なのは、東坡、茶山を慕ふといふことによつて、その原流を解し得るやうに思ふ。手にまかせて二三首を亂抽してこの稿を終ることにしよう。

山居

幽林靠レ杖坐ニ雲深一、此樂正耐レ報ニ素襟一、居士偶來驚ニ靜夢一、歡餘抽レ筆和ニ高吟一。

同

一塢白雲半閒室、山中眞味老愈濃、蘿窓聚レ石書ニ經字一、又逐ニ黃鸝一引ニ短節一。

淤ニ鐘山一途中二首

數里鐘山路、携レ童意自閑、憩看雲靉靆、步聞水潺湲、禽穿ニ花林一出、牛記ニ茆舍一還、此行無レ限樂、謝傳如レ遊レ山。

黃茱明ニ遙塢一、緋桃抽ニ短籬一、午烟叢竹寺、香茗小村扉、萍密池魚聚、麥肥雲雀嬉、幸逢ニ暖風日一、晴影映ニ春衣一。

禪僧もの閑談

この頃、禪僧ものが一部の間に尊重されて來たといふ。しかもそれが從來のやうに、單に茶道關係の大德寺ものとか、黃檗ものとかいふに限らず、曹洞宗のものも、普通の臨濟僧のものも、それ〴〵相當に尊重されて來たといふのである。この尊重の意味が面山の永平祖師の墨蹟に對する敬仰のやうに筆者の人格、筆者の面目を具現するものとして尊重するのであるか否かは大に疑問であるが、しかし、戰時の國民生活が、簡素直截を尙ぶに至つた結果として、各人の心の置き所が、閑寂枯淡の禪僧生活と一味相通ずるところを發見するに至つたためであるかも知れない。それは兎も角、斯樣な風潮を生じた結果、從來殆んど齒牙にもかけられなかつた近年の禪僧、卽ち明治時代の人々のものすら、それ相當に尊重されるやうになつたやうだ。

明治初年の禪僧として知られたものには、臨濟の獨園、洪川、滴水、越溪、曹洞の奕堂、環溪楳仙、坦山等があり、それ〴〵特色を持つてゐたやうだ。就中、奕堂などは、曹洞での書き手の一

人であらう。その方面に通じてゐる人のいふところによると、彼の書いたものには、同じ文句が絶對にないといふことだ。文字に對してある種の鋭敏な良心感をもつてゐた人といふべきであらうか。森田悟由、星見天海といふやうな英漢をその輪下から、打出した程であるからその修養も相當なものがあつたに相違ない。しかし、幕末から明治の初年にかけて、永平、總持兩寺の本山爭ひ當時、總持寺側を代表して京都東京に滯在した彼から、悟由その他に宛てゝ書いた手紙を見ると、對手の永平寺側の臥雲童龍や鐵面淸拙、更らにその掩護者である越前侯松平春嶽に對する嘲罵の文字は、相當辛竦を極めたもので、これが本來空を說き、徹底契悟を說く人のいふことかと疑はしむる點もある。が、宗門上の爭ひとなると、斯樣に平素の態度と全く一變するのは勝ち奕堂ばかりでないと見え、澤庵和尙のやうな人でさへ、寬永の法度に際しては「傳長老と申す者、天魔外道に候」と以心崇傳を罵つた程であるから、それは止むを得ぬ感情であるかも知れない。むしろ見方によつては、澤庵、奕堂のやうな生活を送つた禪僧は、元來單調な寺院生活によつて、淸純な感情の養成にのみ專念してゐるだけ、ある種の正義感の激發に當つては、却つて普通の人以上に、耐忍力が薄弱であるといひ得るかも知れないのである。

當時、奕堂の當面の敵として立つたものは永平寺の臥雲童龍であるが、その參謀は、彥根淸涼寺の鐵面淸拙であつた。彼は勤王僧として維新の志士の間に知られ、後には還俗して鴻雪爪といひ神道に入り文墨に隱れた。彼の書もまた一種の風格をもつたもので、今もなほ一部の間に、相當な信者をもつてゐるやうだ。

○

奕堂の師は風外本高である。彼は書畫をよくし、特に逸格の山水を作りて、近代禪林中の畫僧と稱せられる。一體禪僧中にはなほ幾人かの風外があり、特に諱は慧薰、世に穴風外といはれてゐる風外は、達磨や布袋などを畫いて、一種の特色を發揮してゐる。普通風外といへば、この風外を指すのであるが、それに對して本高の方は、香積寺風外といはれて區別されるのだ。蓋し本高は三河の香積寺に住したからである。彼は狼玄樓と稱された山城興聖寺の玄樓奥龍に直參してその鉗鎚を受け、門下からは奕堂や原坦山のやうな英俊を打出した。坦山は東京帝大に長く印度哲學を講じてゐた學僧である。

本高風外の作には山水が多い。その樹木の如きも一種獨特の線と色とを持つたもので相當の密

畫も描いてゐるやうだが、やはり匆々の間に、胸懷を吐露した粗畫にすて難い氣品の高いものがある。その書も亦一種の風格がある。

尾州萬松寺の瑞岡珍牛も、曹洞の中では風流僧として知られてゐる。彼も一種の畫を描く。天台の豪潮とは極めて親近であつたらしく、豪潮を九州から名古屋に招請したのは、彼が尾州侯に献言したのだと傳へられてゐる。

○

豪潮と交遊したものゝうちには筑前崇福寺の曇榮宗膵がある。彼は普通幻庵を以て知られてゐる。儒者として著名な龜井南溟の俗弟で、昭陽の叔父に當る。彼は暫らく京都に出で、大德寺の孤蓬庵に居たが、その間に大典顯常について詩文を學んだ。彼の詩文「禪月樓集」十七卷、崇福寺にあるといふが、板に附されたか否かは知らぬ。大正の末年に珍書同好會から頒布された騰寫版刷のもの二卷は時折古本屋の店頭に於て見かけることがある。

大典の「北禪詩草」の二卷三卷は、殆んど彼が對州以酊庵に滯在中とその往復の途中の作を以て滿たされてゐる。以酊庵滯在は五山の學僧にとつて一種の格を付ける名譽の詮衡と見做されて

ゐたさうだが、しかし三年に亙る孤島生活は相當の苦痛であつたらう。現に大典の詩を見ても、四季折々の風物を見るにつけて、京洛を思ふの情が頻りに吐露されてゐる。見方によつては、あるひはこれを一種の配流生活と見ることも可能であるかも知れない。その意味で、大典の以酊庵滯在中の作は、澤庵の上ノ山時代の作と比較し得る一種特異の禪宗文學といひ得るかも知れぬと思ふ。

○

一種特異の禪宗文學たる點に於て、卍山が、嗣法問題について江戸に滯在した時代のものも興味のあるものであると思ふ。最初彼等は阿部飛彈守が寺社奉行になつたのを見て、好機逸す可らずとして出訴したのである。蓋し阿部は卍山等の運動に對して深い理解をもつてゐたのであらう。しかし社寺行政の當局者となつて見れば阿部もその個人的意見をもつて、二萬の寺院をもつ曹洞一派の大問題を、右から左と變更する譯にはゆかなかつたものと見ゆる。それで荏苒四ケ年の日子が經つた。その間における卍山等の焦慮と憤慨はあるひは詩となり、文となつて殘つたのだ。これと稍相類似する事件は、奕堂が總持寺を代表した幕末から明治へかけての永平對總持寺

の爭訟事件であるが、その際の奕堂の書き殘した文書は、前にもいうた通り相當激越なものがあり、個人に對する惡聲とも見らるゝ文字すらあるのであるが、卍山のものにはさすがにそんな點がなかつたやうだ。勿論それは改革を目ざす目標が古來の制度であつて、相手が極めて漠然たるものであり、その制度を支持するものも、因襲による宗内の大多數といふ雲を摑むやうなものであつたから、直接當面に罵倒すべき標的がなかつたといふ關係もあるであらう。たゞそのうちに當時の永平寺住持に對して食言を責めてゐる一篇の公開狀があるが、しかしそれも正面から理義をもつての詰責であつて、決して嘲罵になつて居ない。同じ特殊の事件であつても、其處に自らそれ〴〵その性質と面目を異にする個別性がある。

○

私はある道具屋で妙澤の不動と稱するものを手に入れた。幸なことには、落欵に妙澤といふ文字がない。如何なる作者であるかは不明だが、しかし相當の時代を經てゐることは事實であり、表裝も改裝ではあるが、その儘かけられるので、兎も角それを買ふことにした。そして時々床の間にかけ乍ら作者不詳の儘に一年程を過した。そのうち、古い印譜の本を見てゐると、米年といふ文字が目に入つた。それが如何にも不動像の落欵の米年と書いてあるのに似てゐるのである。其處で早速、右の尊像を床の間にかけ、印譜の本を手に持つて、よく照らし合せて見ると兩者全く附合してゐる。即ち米年梵師爲〇（不明）藏主圖として竹天と松屋の二つの印が捺してゐるのだ。これが普ねく世に知られてゐる妙澤の作ならば僞作であらうが、普通世間に知られてゐぬ斯樣な作者のものなら、事によると眞作かも知れぬといふ考が胸に浮んだ。

然らば一體、その米年梵師とは何ものであらうか。米年はいふまでもなく八十八歳を現はしたのであらうが、梵師とは何物か。その印譜の上には、

僧仲安、名梵師松屋と號す、別名竹天叟、相國寺開山普明國師の弟子たり、牧溪を學ぶ、皆草筆なり、多く不動尊等及び大黑天を畫く。自賛に云明應六年十一月前天龍松屋梵師筆すと。又米年梵師ともあり。

とある。「古畫備考」も大體同樣の說明で、たゞ松屋に二人ある事實等を考證してゐるに過ぎない。なほ同書には左の追補がある。

二童子像白描絹地　明治二十年十月二十六日、山名貫義博物館へ持參し、此中尊は脫したる物と見へ

たり。贊も印もあれども讀かたし。此處には名書而已を寫し置なり（千虎補）

として仲安老衲筆と八十七梵師圖の落款だけを寫して掲載してゐる。

その後ある機會に、かねて懇意な獨立展の鳥海青兒君にその話をした。鳥海君は最近足利以前の圖像に非常な興味を覺えて頻りに漁り歩いてゐる。そして相當なものも手に入れたやうである。それで「持つてお出でなさい、拜見しませう」といふことであつたから、持つてゆくと、

「これはいゝぢやありませんか、一つ博物館の秋山先生に見て貰ひませう」といふのだ、蓋し秋山光夫氏は、圖像ものその他の魁集に對する鳥海君の指導者なのである、で、いゝものが手に入ると、まづ氏の鑑定にまつのが慣例であるらしい。それで私の不動像もまた同樣の順序を踏ませようといふのである。その結果、秋山氏はこれをよきものと認めたらしく、折柄妙澤に關する研究の執筆中であつたので、それを其儘暫らく博物館に留めて置いた。そして最近、三年間博物館に預り置くといふ預り證が私の手許に郵送されて來た。

秋山氏の研究によれば、仲安は妙澤の弟子だといふのである。それは鷲尾順敬博士も嘗つて、「禪僧の不動尊像」といふやうな題で同じ意見を發表されたことがある。

○

白隱ものゝ氾濫は、白隱といへばすぐ僞物と思うてよいと考へしむる程である。しかし最近になつて、この氾濫の中にはやはり僞物ばかりでなく、眞によいものもあるものだと信ずるやうな心境に變化して來た。昨年の夏ある處に陶器製作の順序を見學に出かけた。それは富本憲吉氏の門下になつてゐる某女性作家の製作場で、一通り製陶の模樣を見た上、庭づたひに座敷に招請されてお茶の御馳走を受けた。その時庭を通りながらふと座敷の方を見ると、奔放な一行ものが床の間にかゝつて居る。同行の中川男はそれを遠くから一目見るとすぐ「白隱ですな」というた。座敷に上つて見ると、矢張り白隱の印章が捺してある。「本來無一物」と一氣に書き流した草體である。表裝も紙の儘で、多少しみもあるが、兎も角、昨今では珍しいものゝうちに數へて然るべきであらう。女性作家の父に當るこの家の主人は、往時大石大典居士などゝ同參の經歷をもつ人であつたのだ。其處で暫らく新古の燒物を見せられて、いろ〳〵講釋も聞いた。さてそろ〳〵引あげようかと思うてゐると、中川男が突如「時に御主人この白隱はお讓り願はれませんでせうかな」と頗る短刀直入に出たものだ。主人も暫らく呆氣にとられた風であつたが、其處は矢張り禪

できたへたところであらうか、結局簡單に、「それ程お氣に入つたら差しあげませう、お持ち歸り下さい」と至極淡白な返事。そして早速それを捲かせて新紙に包んだ儘、中川男の手に渡した。

こんな始末で、虚空庵の所藏には最近白隱の一行が一軸ふへた。この報酬が一寸問題になつたが、しかしそれもすぐ妥當な方法を講じたといふことである。氾濫してゐる白隱もの〻中にも、僞物ばかりが横行してゐる譯ではない。

○

寶永三年といへば白隱二十二才の年である。その頃彼は、前途の目標について思ひ惱んでゐたのであるが、伊豫の正宗寺に逸禪和尚の提唱を聞き、その間にある松山藩士の家に招かれて種々の書畫を見た。その折大愚和尚の墨蹟を見たところ、筆力放懶、素より巧妙とは申されない。斯樣な粗笨なものが斯く尊重されるのは德の德たるゆゑんであつて文字の巧拙によるものでないと悟り、それまで秘藏してゐた筆道の傳授書や、從來諸方で集めた書畫類を束ねて一炬に付したと傳へられてゐる。斯樣に白隱をして、書道の上に新しい眼を開かしむるに至つた大愚といふのは一體どの大愚なのであらうか。私は長いことこれを疑問にしてゐた。

普通大愚といへば、南禪寺の大愚性智と、妙心寺の大愚宗築があげられる。性智の方は足利時代の名僧で、建仁、東福、天龍、南禪等に歷任し、永享十一年六月八十餘で長逝した。だから今から約五百年以上も以前の人である。宗築の方は愚堂、雲居、一絲等と同時代で、雲居、一絲の念佛禪持戒禪の新傾向に對して愚堂と大愚とは省悟本位の本流を固守したものらしい。そして大愚は最も世間的榮達を避けたらしく、京都における仙洞のお召もひたすら固辭し、江戸に於ては將軍の下命をおそれて、夜中ひそかに退府したといふやうな事實も傳へられてゐる。ところが、この二人の大愚に對して更らに第三の大愚宗演といふのがあるのである。それは性智と宗築の間の時代に當る年代で、慶長十六年に死んでゐる。この程中川男が京都で入手した一幅は前南禪見法泉大愚宗演といふ落欵になつてゐるのである。白隱の見た大愚はこの三人のうち何れか。これが私の疑問であつた。

しかしそれは、最近、東嶺和尚の撰した「神機獨妙禪師年譜因行格」を見るに及んで、苦もなく解決した。卽ち同書寶永三年のところに、

一日赴二官家齊一、家主出二書軸許多一示之。中有二一筐以レ絹包裹秘重者一、展而看レ之、大愚築和尚墨

跟也。筆勢放懶、而總無二巧妙之態一。乃感喜謂、所二以德之爲一德而全不レ關二文字巧拙一。自レ是遠二文墨一、偏爲レ道。

と記してゐる。これによつて見れば、白隱を動かして、墨蹟の尙ばるゝ所以は書の巧拙そのものにあらずして、その人の德であることを覺らしめたのは、大愚宗築の墨蹟であつたことが明瞭だ。禪僧ものに對する昨今の好尙も結局は斯うした氣風が一般に動き出した爲であらうか。

著者略歷

早稻田大學英文科卒業後、東京日日新聞社に入社、副主筆を經て、現在同新聞社（毎日新聞社と改稱）編輯相談役

主なる著書

東日七十年史（昭和十六年五月、東京日々新聞社）
水野直（昭和十六年十二月、水野勝邦）
福地櫻痴（昭和十七年五月、三省堂）
福澤諭吉（昭和十七年九月、三省堂）
羯南と蘇峰（昭和十八年一月、三省堂）

昭和十八年五月一日　初版印刷
昭和十八年五月五日　初版發行
（二、五〇〇部）

近世禪僧傳
㊙定價二圓

（出文協承認
ア390309）

著者　川邊眞藏

發行者　前高一
東京市四谷區新宿一ノ八

印刷者　（東東二一四）西野末雄
東京市本所區東駒形三ノ十

發行所　東京市四谷區新宿一ノ八（小原ビル）
石書房
（會員番號一〇二〇六六號
振替東京一八九〇三九番）

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

ポーツマス講和會議日誌

コロストウェッツ著　島野三郎譯　A5判　二八五頁　價二・五〇　送〇・一五

ロシア側全權ウイッテの秘書として會議に臨んだ著者の、當時の模様を語る忠實なる日誌。日露外交史上甚だ貴重なる文献にして、原書は日本は固より、ロシアにもなく、漸くフランスにて探しあてたるものなり。

詩論

武内勝太郎著　B6判　三四〇頁　價二・五〇　送〇・二〇

「藝術民族學研究」「藝術論」等を發表し、次第に評論に於ても頭角を顯はした、詩人竹内勝太郎は、詩の學的基礎づけに全生命を打込んだのであるが、遂にこの詩論の刊行を見ないで不慮の死を遂げたのである。著者の崇高な東洋的風格を、その理論體系の中に偲びたいものである。

釣便覽

松崎明治著　A6判　四〇〇頁　價二・〇〇　送〇・一五

著者は「釣技百科」に於て、既に釣の研究指導者としてその權威を認められたのであるが、本書は釣全般に對する、あらゆる知識の集大成である。その周到なる統計的科學的記事は、もつて釣人すべてに一讀をお薦めしたい。

直葉
規格B6
(停)¥2.00

終